エディション比較研究
ショパン≪ピアノソナタ第２番Op.35≫第１楽章
—系譜をたどる—

A comparative study by several scores on Chopin's
≪Piano Sonata No.2 Op.35≫ mov.1
— trace the line of score —

仲田　久美子
Kumiko NAKADA

はじめに

ショパンの楽譜は多くの版が存在する。ニューグローヴ世界音楽大事典では「ショパンの楽譜には，普通以上に編集者の手が入っている」（Temperley, Nicholas『ニューグローヴ世界音楽大事典』第８巻，遠山一行訳，講談社，1997年，567-8頁）とある。つまり，ショパンの作品は様々な人の手によって編纂され出版され続けてきたということである。なお，ポーランド国立音楽出版局から出版されたエキエル編纂のナショナル・エディションには詳細な校訂報告の要約が別冊で添えられており，それを読めば我々でも楽譜の作成過程を多少知ることが可能である。ところで，出版されているすべての楽譜にそのような校訂報告が添えられている訳ではない。そのため，他の版がどのような資料を参考に作成されたのかを知ることは困難である。本論では，各版を比較することでショパンの作品における楽譜出版や編纂の変遷を検証し，その系譜をたどりたい。

１．ショパン作品における出版事情

楽譜の編纂において自筆譜は重要な資料であり，これについて今井は「スケッチ，下書き，清書された最終稿などがこれに当たる」（今井顕『ムジカノーヴァ』音楽之友社，1989年９月号，117頁）と述べている。そして「ショパンは生存中３つの版を同時に出版した」（田村進『音楽大事典』第３巻，平凡社，1992年，1253頁）という事実から，ショパンが同時に３冊の原稿を必要としていたことがわかる。このとき，ショパンがフォンタナ[1]やグートマン[2]などに筆写を頼んだ（河合優子，横山幸雄『ショパン』CHOPIN magazine，2010年４月号，29頁）ため，初版の前段階において「手稿」と「手稿の複写」の両方が存在することになる。つぎに，初版を出版する前にショパン自身によって校正できたものとできなかったものとがある（下田幸二『ムジカノーヴァ』音楽之友社，2010年１月号，60頁）。したがって校正の際，ショパンにより新たに変更された部分がある場合，「校正前の初版」と「校正後の初版」が存在することになった。また，ショパンが弟子のレッスン時に新たに書き加えたり変更したりすることもあった（下田，60頁）。ショパンの死後も，同時代のピアニストが編纂に関わり実用的な版や批判的な版などが出版される場合には，彼らの意見を取り入れ反映させることもあり，校正や訂正で譜面が書きかえられたりすることもあった。これらは「校訂版」とよばれる。≪ピアノソナタ第２番≫の出版については，大まかに区分するなら，出版される前（1839年〜40年），出版後しばらく（1841年〜1880年頃までの版権が切れるまでの間）[3]，その後（版権が切れてから現在まで）の３期に分けることができる。このような出版事情が複数の楽譜の存在を促したと考えられる。

---

1 フォンタナ（Fontana, Julian, 1810-1869）はポーランドのピアニスト，作曲家である。ジャン＝ジャック・エーゲルディンゲル『増補改訂　弟子から見たショパン』米谷治郎，中島弘二訳，（音楽之友社，2009年），218-9頁。
2 グートマン（Gutmann, Adolf, 1819-1882）はショパンの弟子。エーゲルディンゲル，231-2頁。
3 ショパン（1810-1849）の出版物は1880年頃から発刊された。大崎滋生『楽譜の文化史』（音楽之友社，1993年），170頁。

２．版の種類

ショパンの≪ピアノソナタ第２番≫においては，まず，1860年にテレフセン[4]編纂でリショー社から出版された『フレデリック・ショパンのピアノ曲集』（全12巻）がある。この全集の編纂を引き継いだのがミクリ[5]で，彼は序文で「編集者が病に倒れたためにこのリショー版は不完全なものになった」（エーゲルディンゲル，243頁）と断りを入れている。その後ミクリは，1880年にキストナー社の『ショパン作品集』（全17巻）の編纂をしている。パデレフスキ版では，このキストナー社の楽譜のことをミクリ版と呼んでいる（パデレフスキ校訂，田村進，寺田由美子訳，アーツ出版，1993年，123頁）。

それ以外にも，1880年頃，ブライトコプフ・ウント・ヘルテル社が『ショパン全集』（全14巻）を（大崎滋生，194頁），さらに，ペータース社も『ショパン全集』を出版している（Temperley，567頁）。ニューグローヴ世界音楽大事典には，これら３つの1880年頃出版された全集について，「いずれも相異なる写本と版を用いているが，すべての作品の出所を調査して明らかにしたものではない。近年出版された膨大な数の版のほとんどはこれら三つの版のうちの一つと見られる（後略）」（Temperley，567頁）と記載されている。残念ながら筆者はこれら３つの楽譜を見ることができなかったため今回の比較には使用していない。さらに1932年には，ガンシュ[6]編纂のオックスフォード原典版『ショパン全集』が出版されている。この事業は「学術的根拠のある版を作ろうという最初の本格的な作業が完遂された」（Temperley，567頁）ことによる。また，パデレフスキ版には「クリントヴォルト編纂のボーテ・ウント・ボック社版」（パデレフスキ校訂，124頁）も参考にしたことが記載されていることから，この版の存在も確認できる。

３．版比較検証

上記の諸版を比較するにあたり，初版の持つそれぞれの特徴を検証することから始めたいと思う。なお，初版といっても≪ピアノソナタ第２番≫のフランス初版の場合，第１刷から第４刷までは内容が異なっている[7]。そのため拙論ではショパンの初版が公開されているホームページ[8]に掲載されている譜面から情報を得て，それらを検証の対象とした。つぎに，校訂報告が掲載されている版についてはその内容から，参考にされたであろう版を推測して検証し，そのあとで筆者が手にすることができた版を比較した。いくつかの版で日本語訳されたものについては翻訳前の譜面と内容が同じであることから今回は比較の対象としなかった。拙論ではポーランド国立音楽出版局から1950年に出版されたものをパデレフスキ版，また，同局から1995年に出版されたものをエキエル版と呼んでいる。なお今回，比較のために使用した楽譜は11及び12頁の「使用楽譜とその略号一覧」に掲載した。ただし，使用した楽譜に記載されている出版年をそのまま転記したため各社の第１刷の出版された年と同じでない場合がある。そのうちいくつかの版は出版年が不明であるため，その場合は国立音楽大学附属図書館のデータをもとにした。また，楽譜の通称は出版社名でよばれるものと，校訂者名でよばれるものがあり厳密には統一されていない。そのため，拙論では出版社名及び校訂者名のいずれかのアルファベットの最初の一部分を略して記載した。略号については「使用楽譜とその略号一覧」を参照されたい。

なお，今回比較するのは，①和声に関わる音の違い，②タイによってメロディの変わる音の違い，③タイによって和声の充実度が変わる音の違い，④記譜の違い，すなわち異名同音，反復記号の違い，

---

4 テレフセン（Tellefsen, Tomas Dyke Acland, 1823-1874）はノルウェーのピアニスト，作曲家，教師。エーゲルディンゲル，242-3頁。

5 ミクリ（Mikuli, Karol, 1819-1897）はアルメニア系家族の出身のショパンの弟子でピアニスト，教育者，作曲家。エーゲルディンゲル，250-1頁。

6 ガンシュ（Ganche, Edouard, 1880-1945）はフランスの音楽学者。エーゲルディンゲル，141-2頁。

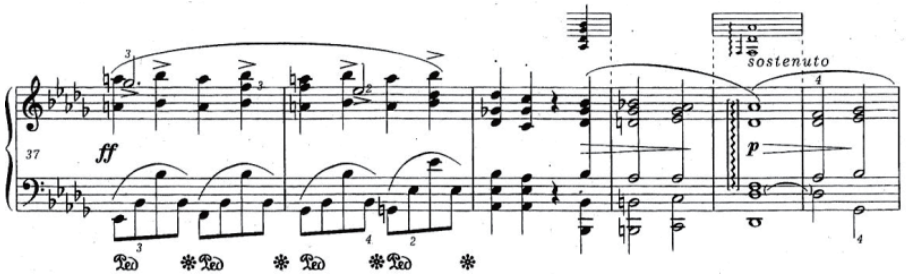
7 Chopin, Frédéric. *Sonaty*, edited by J. Ekier,（PWM, 1995）別冊校訂報告５頁。

8 Chopin's First Editions Online (CFEO),　http://www.cfeo.org.uk/dyn/index.html。

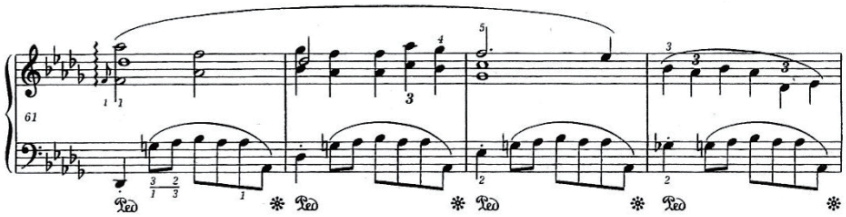
及び⑤その他（スラー，スタッカート，テヌート，強弱記号）についての違いの５点である。これらの５点を比較対象として選んだのは，音そのものについては校訂者が主観を出しにくいと考えたからである。また，表情記号，強弱記号，特に運指やペダリングは校訂者の主観が表れやすいと思われるため，今回は特に目立つ部分だけを取り上げて比較した。そして，比較するにあたり，エキエル版の解説において明らかに落丁と判断される項目については取り上げていない。また，小節番号はエキエル版の小節番号を記した（パデレフスキ版とクルチ版には小節番号では104小節目の１括弧と次の小節の2括弧を別の小節としているが，ヘンレ版とエキエル版では同じ小節番号をつけている。よって，前者は後者より１小節多くなり小節番号にずれが生じる）。また，譜例についてはエキエル版を引用した（別の版を引用する際は版名を明記した）。なお，文中の音名はドイツ式で表記した。また，１楽章は２分の２拍子であるため拍の数え方もそれに従っている。

①和声に関わる音の違い

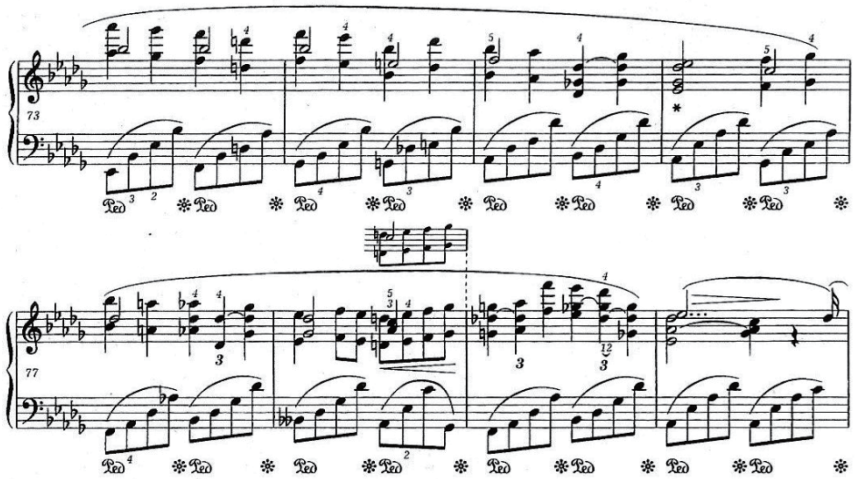
１）第39小節，ト音譜表，最後の和音の最低音においてEkではas音とb音の両方を掲載しているが，他の版ではas音である。Ekは２通り掲載している。【譜例１】第37～42小節



２）第61小節，ヘ音譜表，１拍目においてMi，Du，Co，Pe，春秋，Pa，Ag，EkではDES音である。その他の版ではそれより１オクターヴ高いdes音である。【譜例２】第61～64小節

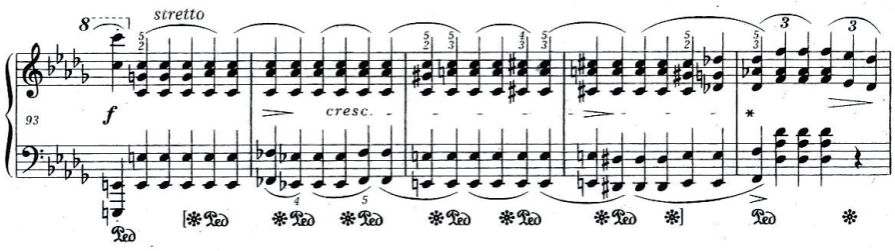


３）第76小節，ト音譜表，１拍目和音の最下音がdes[1]音なのはGE，Ka，He，Ekで，他の版では es[1]音である。【譜例３】第73～80小節

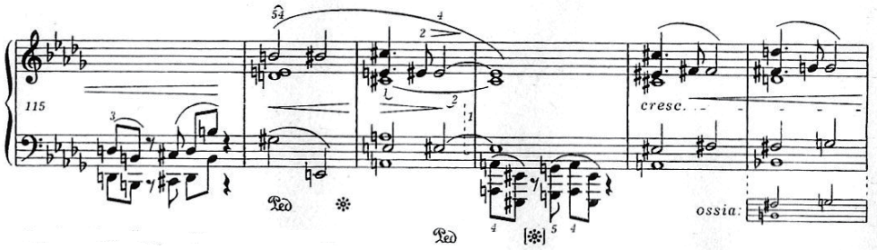


４）第78小節，ト音譜表，２拍目のas^1音とc^2音が4分音符なのはEE，Mi，Co，Ek で，as^1音とc^2音が２分音符なのはDu，Sa，春秋，Pe，Pa，Ku，Ri，Agである。また，as^1音がなくc^2音が２分音符なのはGE，Kr，Ka，Heである。なお，FEは落丁と思われる。Ekは２通り掲載している。【譜例３】

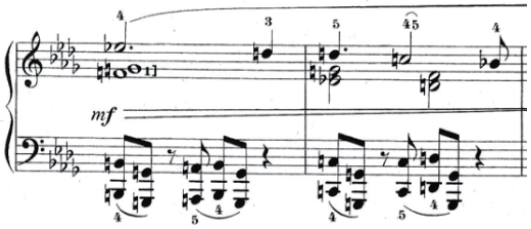
５）第93小節，ト音譜表，１つ目の４分音符においてg^3音があるのはDu，Co，Pe，Sa，春秋，Pa，Ri，Agで，その他の版にはg^3音がない。【譜例４】93〜97小節



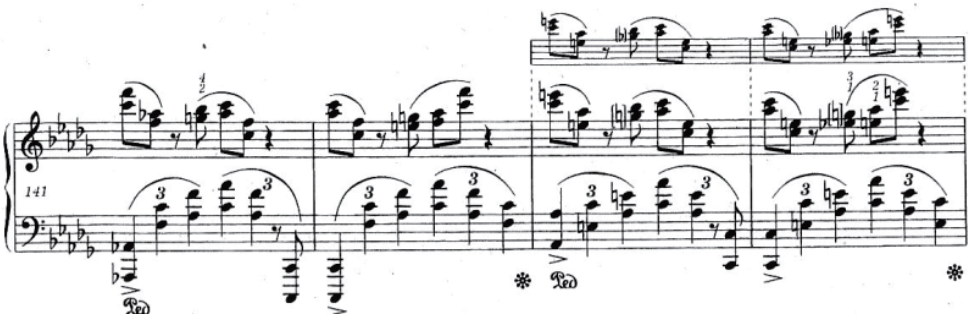
６）第120小節，ヘ音譜表，１拍目の最下音がH音なのはGE，Mi，Kr，Pe，春秋，Pa，Ku，Ri，Heで，その他の版ではB音である。【譜例５】第115〜120小節



７）第122小節，ト音譜表，２拍目の内声で d^1/f^1音が重音になっているのはDu，Pe，Sa，春秋，Ri，Agで，GEを除くその他の版ではf^1音の単音である。なお，GEでは内声のes^1/g^1音が全音符のため d^1/f^1音は書かれていない。【譜例６】春秋社版　第121〜122小節，または【譜例16】



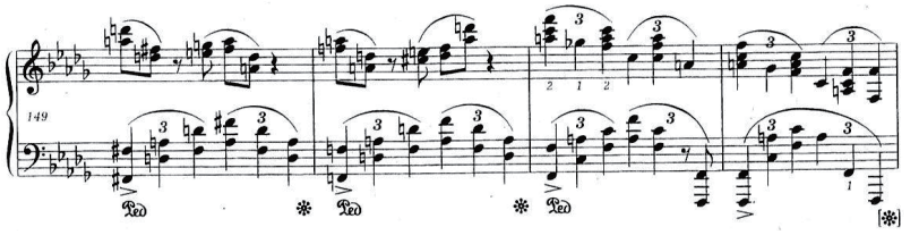
８）第141〜142小節，ヘ音譜表，両小節の１拍目のオクターヴと第141小節の最後の８分音符のオクターヴにおいてAS/AS^1音及びC/C^1音なのはGE，Du，Kr，Ka，Pe，Sa，春秋，Pa，Ku，Ri，Ag，He，Ekである。他方，FE，EE，Mi，Coではこれより１オクターヴ高いas/AS音及びc/C音である。【譜例７】第141〜144小節



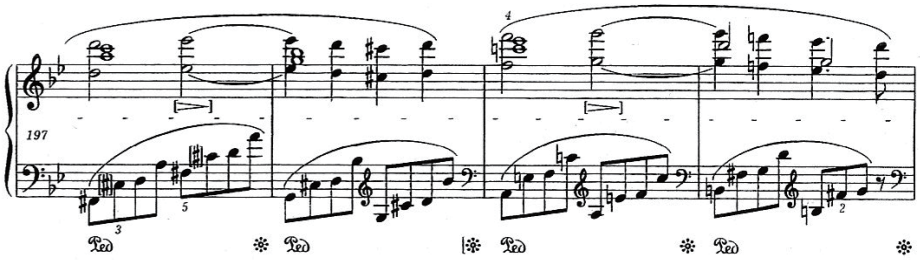
９）第143〜144小節，ト音譜表，各小節３つ目の８分音符において各初版ではges^2音であるが，その

他の版ではg^2音である。Ekは２通り掲載している。【譜例７】

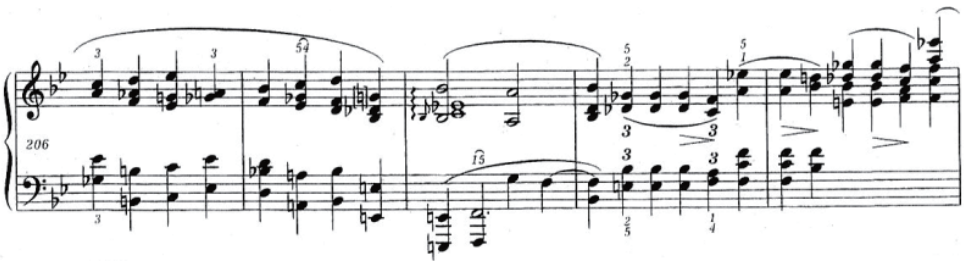
10）第151～152小節，ト音譜表，各小節前半3連符2つ目の音がg^1/g^2音なのはDuとPeで，その他の版ではges^1/ges^2音である。【譜例８】第149～152小節



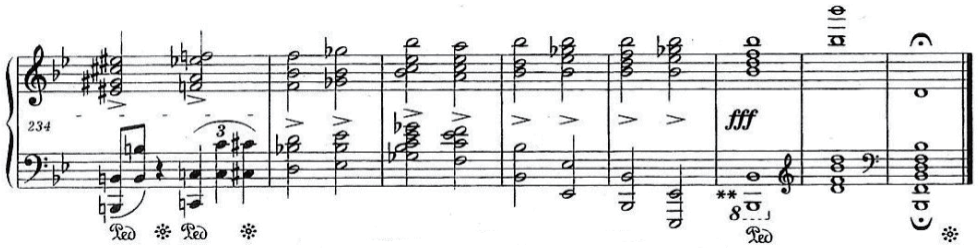
11）第197小節，ヘ音譜表，２つ目と６つ目の８分音符がc/c^1音なのはFE，EE，GE，Ka，Kuで，その他の版ではcis/cis^1音である。【譜例９】第197～200小節



12）第207小節，ヘ音譜表，１つ目の４分音符がd/b/d^1音なのはEE，Mi，Co，Pa，Agである。Krを除いたその他の版ではd/f/b/d^1音である。なお，Krではd/d^1音である。【譜例10】第206～210小節



13）第239小節，ヘ音譜表，B/B^1音なのはFE，EE，GE，Mi，Ka，春秋，Pa，Heである。その他の版ではこれより1オクターヴ低いB^1/B^2音である。【譜例11】第234～241小節



②タイによってメロディの変わる音の違い

１）第37～38小節，ト音譜表，f^2音に小節線をまたぐタイがあるのはMi，Du，Co，Pe，Sa，春秋，Agである。その他の版にはタイがない。【譜例１】

③タイによって和声の充実度が変わる音の違い

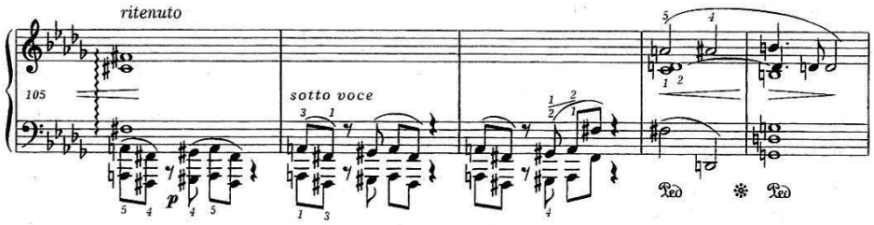
１）第41～42小節，ト音譜表，des^1音に小節線をまたぐタイがあるのはMi，Du，Co，Pe，Sa，春秋，

Ku，He，括弧付きでEkである。他方，タイがないのはFE，EE，GE，Kr ，Ka，Pa，Agである。また，この部分のRiは特殊である。【譜例１】

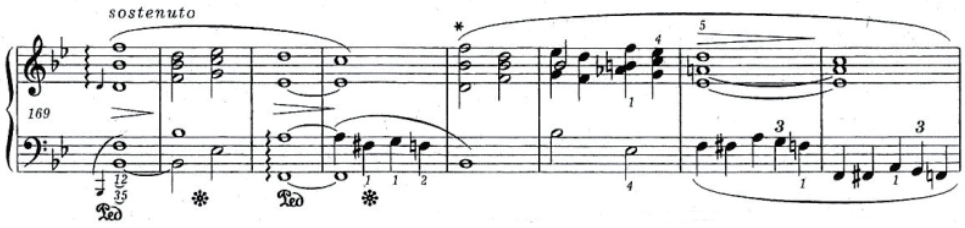
２）第41～42小節，ヘ音譜表，des音に小節線をまたぐタイがあるのはGE，Kr，Ka，Pe，春秋，Kuで，その他の版にはタイがない。【譜例１】

３）第79小節，ト音譜表，２拍目の３連符の最初の２つの４分音符のges[2]音にタイがあるのはFE，EE，GE，Mi，Co，Kr ，Ka，Sa，春秋，Pa，Ri，Ag，He，Ekである。他方，Du，Pe，Kuではタイを同じ音価である２分音符に替えて記譜している。さらに，Du，Co，Pe，Ekでは最後の２つの和音のdes[2]音にもタイがある。Krではこの小節の最後の和音と次の小節のdes[2]音がタイになっている。【譜例３】

４）第108～109小節，ト音譜表，小節線をまたぐd[1]音に前の小節からタイがないのはFE，EE，Mi，Coで，その他の版にはタイがある。【譜例12】第105～110小節

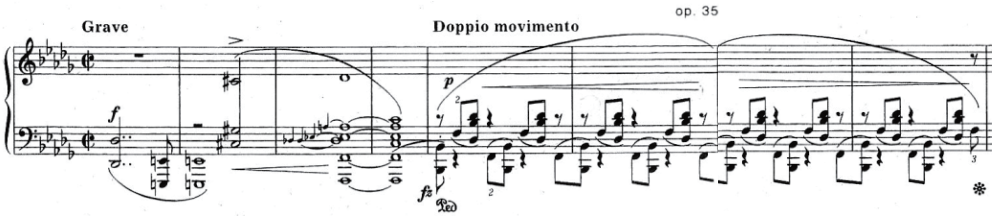


５）第169～170小節，ト音譜表，１拍目のb[1]音が前の小節からタイがあるのはMi，Du，Kr，Co，Pe，春秋，Riであり，その他の版にはタイがない。【譜例13】第169～176小節



④記譜の違い，すなわち異名同音，反復記号の違い

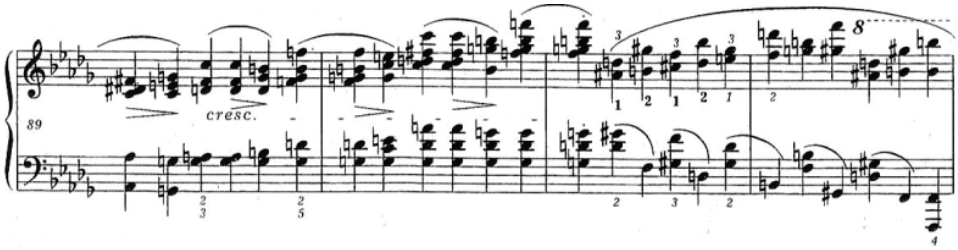
１）第５小節，一重縦線で記譜しているのはFE，EE，He，Ekである。そして，「グートマンには，速さが変るような箇所で複縦線にしてしまう癖があった」（河合，横山，30頁）ということに関連してかKr，Ka，Saでは複縦線である。その他の版では反復記号である。また，Krには「反復は不適当」（クロイツァー校訂，音楽之友社，1992年，７頁）という注がある。なお，反復については興味深い雑誌対談がある[9]。【譜例14】第１～８小節



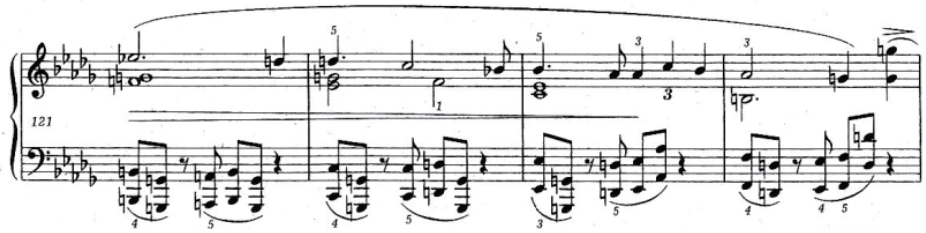
9 ショパン≪ピアノソナタ第2番≫1楽章の「第5小節への反復」について両者の意見が対談の中で語られている。河合，横山，29-31頁。

２）第５～８小節，上下段にヘ音譜表が置かれ大譜表全体を使って記譜しているのはDu，Pe，Sa，Ku，春秋で，その他の版では下段にまとめて記譜されている。【譜例14】

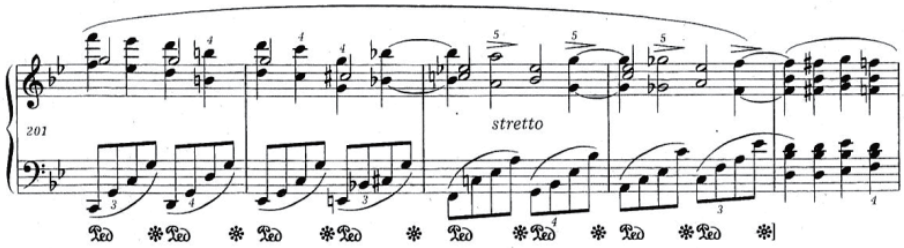
３）第91～92小節，ト音譜表とヘ音譜表，重音の上下どちらかにおいてAS/as/as^1/as^2/as^{3}音で記譜しているのはPaとAgである。Riを除くその他の版ではGIS/gis/gis^1/gis^2/gis^{3}音で記譜している。Riは前小節をAS/as/as^1/as^2/as^{3}音，後小節をGIS/gis/gis^1/gis^2/gis^{3}音で記譜している。【譜例15】第89～92小節



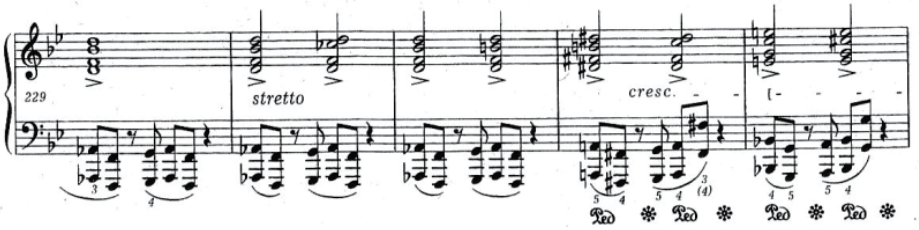
４）第122小節，ト音譜表，高音部においてC^{2}音を８分音符と付点４分音符のタイで記譜しているのはSa，Pa，Ri，Agである。Krを除くその他の版では同じ音価の２分音符で記譜されている。Krでは，４分音符，２分音符，４分音符の組み合わせで記譜している。【譜例16】第121～124小節



５）第202小節，ト音譜表，2拍目がg^1/des^2/g^{2}音なのはPaとAgで，他の版ではg^1/cis^2/g^{2}音である。【譜例17】第201～205小節



６）第233小節，ト音譜表，２拍目の和音がe^1/g^1/des^2/e^{2}音なのはSa，Pa，Agで，他の版ではe^1/g^1/cis^2/e^{2}音である。【譜例18】第229～233小節

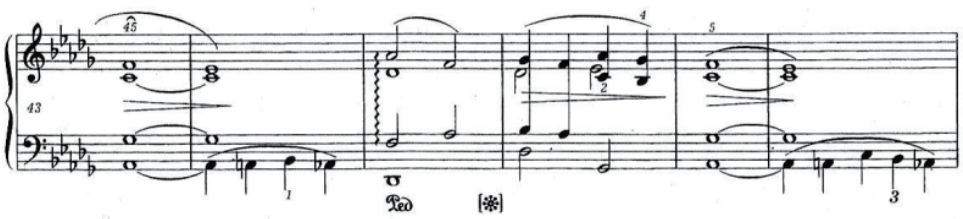


７）第234小節，ト音譜表，１拍目の和音がf^1/as^1/des^2/f^{2}音なのはSa，Pa，Ri，Agで，その他の版ではeis^1/gis^1/cis^2/eis^{2}音である。【譜例11】

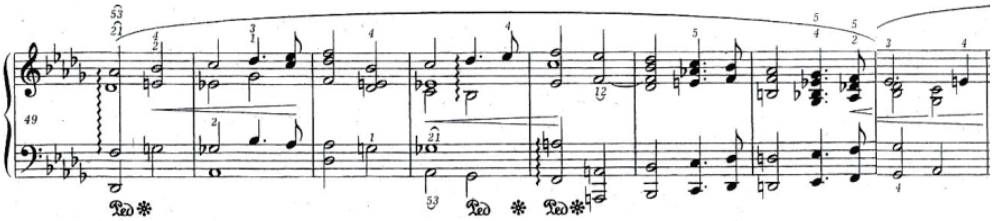
８）第241小節，和音構成音の７音の配置において，上段が前の小節から続くト音譜表なのはFE，EE，GE，Mi，Co，Ka，He，Ekで，その他の版では上段にもヘ音記号を用いている。【譜例11】

⑤その他（スラー，スタッカート，テヌート，強弱記号）についての違い

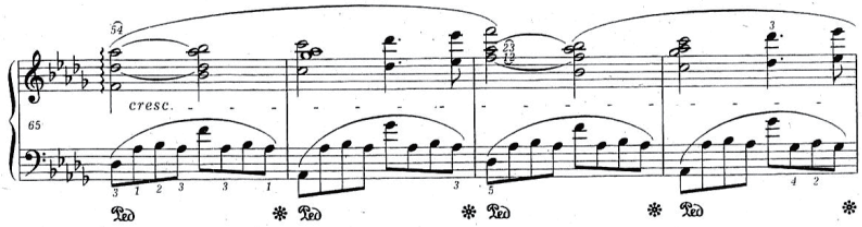
１）第46小節内に*dim.*があるのはGE，Mi，Ka，Sa，He，Ekで，第45〜46小節にかけて長い*dim.*があるのはDu，Pe，Kuである。第46小節内に*dim.*と*cresc.*が対であるのはKr，Pa，Agで，Co，春秋，Riにはいずれの強弱記号もない。なおFEでは，第45〜46小節にかけて強弱記号はないが第47〜48小節にかけて長い*dim.*がある。またEEでは，第47小節内に*dim.*がある。【譜例19】第43〜48小節



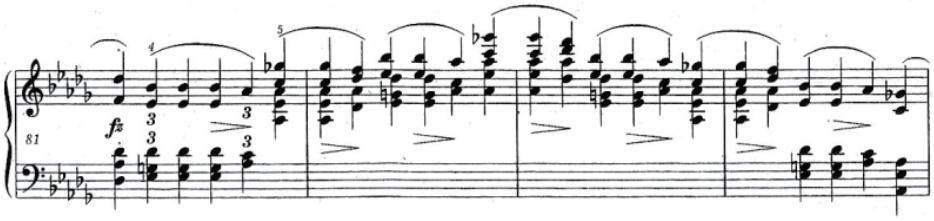
２）第53〜56小節，ヘ音譜表，低音部にスラーがないのはFE，EE，GE，Mi，Du，Kr，Ka，He，Ekで，その他の版にはスラーがある。また，Saでは第51〜56小節に大きなスラーがある。【譜例20】第49〜56小節



３）第65〜68小節，ヘ音譜表，各小節の最初の音にスタッカートがあるのはDu，Pe，Ku，春秋，Pa，Ri，Agであり，Krを除くその他の版ではスラーはあるがスタッカートはない。Krにはスラーもスタッカートもない。【譜例21】第65〜68小節

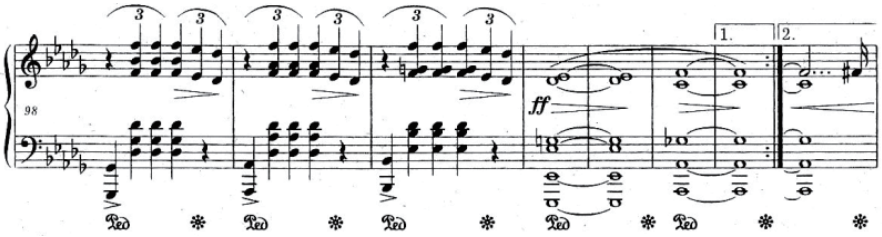


４）第81〜84小節，*dim.*が３音を対象についているのはKa，Sa，Heで，Krを除くその他の版では２音を対象についている。なおKrにはこの記号がない。そしてGEには非常に曖昧な位置と長さの*dim.*がついている（強いて言うと３音を対象にした*dim.*がついているように見える）。【譜例22】第81〜84小節



５）第91〜92小節，ト音譜表，この２小節間にわたり大きなスラーがあるのはFE，EE，GE，Mi，Du，Co，Ka，He，Ekであり，ヘ音譜表と同様の小さなスラーだけなのはSaである。そして，大小どちらのスラーもあるのはPe，Ku，Pa，Ri，Agで，大小どちらのスラーもないのは，Krと春秋である。【譜例15】

６）第101小節，*ff*があるのはMi，Kr，Co，Ku，Pa，Ri，Ag，Ekで，*ff*の代わりにアクセントがあるのはSa，春秋，Heである。またFE，EE，GE，Du，Ka，Peには*ff*もアクセントもない。【譜例23】第98〜104小節



７）第104小節，２括弧の部分に，*rit.*または*ritenuto*や*riten.*があるのはPe，Sa，春秋，Paである。FE，EE，GE，Mi，Du，Co，Ka，Ag，He，Ekでは第105小節に*rit.*または *ritenuto*や*riten.*がある。そしてKrには速度記号がない。Riでは*rit.*はないが，第105小節に*a tempo*がある。Kuでは第97小節に*rit.*がある。【譜例12】及び【譜例23】

８）第105小節，*p*がヘ音譜表の下についているのはFE，GE，Mi，Ka，Sa，He，Ekで，KrとCoと春秋を除くその他の版では，大譜表の中央部やや下方についている。Coでは大譜表の中央に(*p*)，春秋には大譜表の中央に*p*がある。なおKrには強弱記号がない。【譜例23】

９）第151〜152小節，2小節間に渡る大きなスラーがありその他の小さなスラーがないのはPaとAgである。Krを除くその他の版では3連符ごとにひとつの小さなスラーがあるだけで大きなスラーはない。Krではいずれのスラーもないが，テヌートがついている。【譜例８】

10）第173〜176小節，第174小節内に*dim.*があるのはGE，Ka，Sa，Heで，第173〜174小節に長い*dim.*があるのはDu，Pe，春秋である。Krでは第175小節に向けて*cresc.*がある。またFEには第175〜176小節に*dim.*があり，EEでは第175小節内に*dim.*がある。その他の版においてはいずれの強弱記号もない。【譜例13】

11）第206〜209小節，ト音譜表のスラーが第207小節の終わりで途切れず第209小節1拍目まで続くのはFE，EE，Mi，Co，Sa，Ku，Pa，Agである。Krを除くその他の版ではト音譜表のスラーが第207小節の終わりで一度切れている。Krにはスラーはないがテヌートがある。【譜例10】

結論

以上の分析から次のことが明らかになった。すなわち，1880年頃に出版されたキストナー，ペータース，ブライトコプフ・ウント・ヘルテルの３つの版は，間違いなくその後の版に大きな影響を与えたということである。

まず，年代の古いものから検証していくと，Miについて「作業の基になったのはフランス初版」（エーゲルディンゲル，250頁）ということから，MiはFEに近いということがわかる。また，Miについて「大半はキストナー版によっている」（Temperley，567頁）ということから，キストナー社のMiとシャーマー社のMiは，ほぼ同様の内容と考えて間違いないと思われる。

そしてCoについて，「楽譜自体はフランス版を根底に，自筆譜やほかの解釈版などを参考に編集され，（後略）」（八田惇『ムジカノーヴァ』音楽之友社，2008年9月号，55頁）ということから，CoはFEを基にしていることがわかる。

そして，Krでは「いくつかの版ではナチュラルがついてG音になっているが間違いであろう」（ク

ロイツァー校訂，９頁）ということから，KrではG音になっているDuやPeが参考にされた可能性がある（①10参照）。また，ショパン≪バラード1番≫の７小節目，左手の和音の最高音を例にして比較した栗山が，PeとKrがD音を，HeとEkはEs音を記譜していることを指摘している（栗山和『ムジカノーヴァ』音楽之友社，2002年11月号，80頁）。このことからも，KrがPeと何らかの関係があると考えられる。たとえ改訂新版で運指などを変更していたとしても，音そのものは1880年と1948年のPeは同一のものと捉えてよいであろう。つまり，Peの1880年の版と1948年の版が同一の場合，KrはPeを参考にしている可能性が高い。

そして，春秋には「ペータース版では」（井口基成校訂，春秋社，1978年，10頁）とあることから，Peを参考にした可能性がある。また，同じ箇所においてDuでも本位記号がつけられG音になっていることを考えると，ここでPeだけに限定している春秋は，Duとはあまり関連がないと思われる。また，「日本の出版社が出しているショパンの楽譜は，ほとんどこの（＝Pe, c.1948）ショルツ＝ポツニアック版を底本にしている」（栗山，78頁）ことからも，春秋はPeに近いということがわかる。

さらに，「パデレフスキ版の第５小節にリピート記号があるのは，元はと言えばドイツ初版から来ているのです」（河合，横山，29-30頁）ということから，PaはGEに近いと考えられる。しかし，「音符の配置や外観についても，編集者は，原資料とはやや異なった修正を加えた。ショパンの見落とし（特に変化記号）を補足しただけでなく，和音の記譜もきちんと書いておいた。更に，音符の配置も変更したが，これは音楽をはっきりと視覚的に捉えるのに役立ち作曲家の意図を理解する手助けにもなる（後略）」（パデレフスキ校訂，116頁）ということから，Paは原典を重視した版というよりは，実用版であるといえよう。また，音楽大事典ではPaに関して「原典版ではない」となっている（田村，1253頁）。

そして，Heの「グートマンの手稿譜とGEを基とした」（E. Zimmermann校訂，Henle，1976/2004年，33頁）ということ，そして「ヘンレ版には自筆原稿とEOAL（＝GE）通りの楽譜がそのまま掲載され，これほど重大な作曲者の修正がまったく考慮されていない」（エーゲルディンゲル，219頁）ということ，さらに，「ヘンレ社は，原資料の比較検討に際して，異稿があった場合，ドイツ語圏の資料を重く見る傾向がある」（栗山，79頁）ということなどから，HeはGEに近いといえよう。

そして，Ekについては「もっとも重要に考えているのはフランス初版最終刷とグートマンの筆者譜です」（河合，横山，29頁）ということから，EkはFEとGEの両面を持ち合わせていると考えられる。

その他の版については，検証結果を参考に系譜をたどりたい。検証結果の中で興味深いのは，PeがDuと92％の一致，そして，DuがSaとAgに84％一致したことである。その一方で，Agは同時にPaとも86％一致している。しかしながらAgとPeは77％の一致にとどまり，他と比べるとその比率は低い。ところで，Riと春秋もPeと85％の一致である。これらのことからPeは多くの版の源泉であると考えられる。ところで，当初，論者はDuとCo（両者ともパリの出版社であるため）に何らかの関係があるかもしれないと予測していた。しかし，Coは音そのものだけでみた場合（検証①～③），Miとは77％，そしてDuとは54％の一致にとどまった。このことから，DuとCoはあまり関係が深くないと考えられる。

最後に付記しておくと，今回，2010年にペータース社から出版された『ショパン全集・新校訂版』がまだ一般発売されておらず，検証の対象とすることができなかったのは残念である（2010年12月現在）。今回は１楽章のみを比較検証し，系譜を試作したが，今後，他の楽章や他の作品等を検証することでこの系譜のさらなる確証を得たいと考えている。これは言い換えると，この拙論において挙げた38項目のみでの検証では今回の分析結果の確証を得られないということでもある。しかしながら，校訂報告が掲載されていないエディションを取り扱うことは，編纂者の考えで書き換えられることを考えると，相互関係や系統を探るうえでいささか困難であるように思われる。なお，「系譜図」は12頁に掲載した。この図は横列が時系列を表している。最後に，「EEはFE2を基にしている」（Ekier校

訂，別冊校訂報告５頁）ため，EEはFE系であることを補足しておく。

参考文献一覧

今井顕「その裏に秘められた労力」『ムジカノーヴァ』東京：音楽之友社，（短期集中連載・Lecture series ＜1＞原典版ができるまで），1989年9月号，112-9頁。

エーゲルディンゲル，ジャン＝ジャック『増補改訂　弟子から見たショパン』米谷治郎，中島弘二訳，東京：音楽之友社，2009年，初版1983年，増補・改訂版第1刷2005年。Eigeldinger, Jean-Jacques “CHOPIN vu par ses éléves (nouvelle édition remaniée)”, Neuchâtel, 1988.

大崎滋生『楽譜の文化史』東京：音楽之友社，1993年。

河合優子，横山幸雄，文：阿部恭子「侃諤対談！」『ショパン』東京：CHOPIN magazine，（特集：ナショナル・エディションを細かく検証），2010年４月号，29-35頁。

栗山和「ショパンの楽譜はどうなる？ナショナル・エディションとショパン国際ピアノ・コンクール」『ムジカノーヴァ』東京：音楽之友社，（特集：エキエルによるナショナル・エディション楽譜をめぐって），2002年11月号，78-81頁。

下田幸二「これだけは知っておきたい！」『ムジカノーヴァ』東京：音楽之友社，（特集：ショパンの記譜法とその正しい解釈），2010年１月号，58-69頁。

高橋淳『楽譜の正しい選び方』東京：春秋社，1989年。

田村進「刊行楽譜」［ショパン］の項『音楽大事典』第3巻，東京：平凡社，下中弘編集，1992年，1253頁。

Temperley, Nicholas「出版譜」［ショパン］の項『ニューグローヴ世界音楽大事典』第8巻，東京：講談社，遠山一行訳，柴田南雄，遠山一行総監修，1997年，567-8頁。

八田惇「ショパンのエディションはなぜこんなに多いのか？」『ムジカノーヴァ』東京：音楽之友社，（特集：エディション選びのポイント・ショパン），2008年９月号，54-57頁。

使用楽譜とその略号一覧

FE: Chopin, Frédéric. *Sonate, Op.35,* Paris: Troupenas & Co., 5/1840, T.891, ©Bibliothèque National de France, http://www.cfeo.org.uk/apps/.

EE: Chopin, Frédéric. *Grande Sonate, pour le Piano Forte, Op.35*, London: Wessel & Co., 10/6/1840, W&CoNo3549, ©The British Library, http://www.cfeo.org.uk/apps/.

GE: Chopin, Frédéric. *Sonate pour le Piano, Op.35*, Leipzig: Breitkopf&Härtel, 5/1840, No.6329, © University of Chicago Library. http://www.cfeo.org.uk/apps/.

Mi: Chopin, Frédéric. *Sonata,* edited&fingered by C. Mikuli, New York: Schirmer, 1895, 11744.

Du: Chopin, Frédéric. *Sonate,* edited by C. Debussy, Paris: Durand, ［c.1915］, D&F9708.

Co: Chopin, Frédéric. *Sonate*, edited by A. Cortot, Paris: Salabert, 1930, E.M.S.5192.

Ka: Chopin, Frédéric. *Sonate*, compiled by A. Lipsky, New York: E.F. Kalmus, ［c.1947］.

Pe: Chopin, Frédéric. *Sonaten*, kritisch revidiert von H. Scholtz/ Neue Ausgabe von B. v. Pozniak, Frankfurt: c.f. Peters, ［c.1948］, 9899.

Sa: Chopin, Frédéric. *Sonate,* edited by E. Sauer, Mainz: B.Schott's Söhne, ［c.1948］, 0398/99.

春秋: Chopin, Frédéric. *Sonata*, 井口基成校訂，東京：春秋社，1978年，（第1刷は1949年発行）。

Ku: Chopin, Frédéric. *Sonaty*, Ridi. Dr.V. Holzkneht/ Revidoval V. Kurz, Prague: Melantrich, 1949, M106.

Ri: Chopin, Frédéric. *Sonate*, edited by Brugnoli- Montani, Milano:Ricordi, ［c.1956］, E.R.2501.

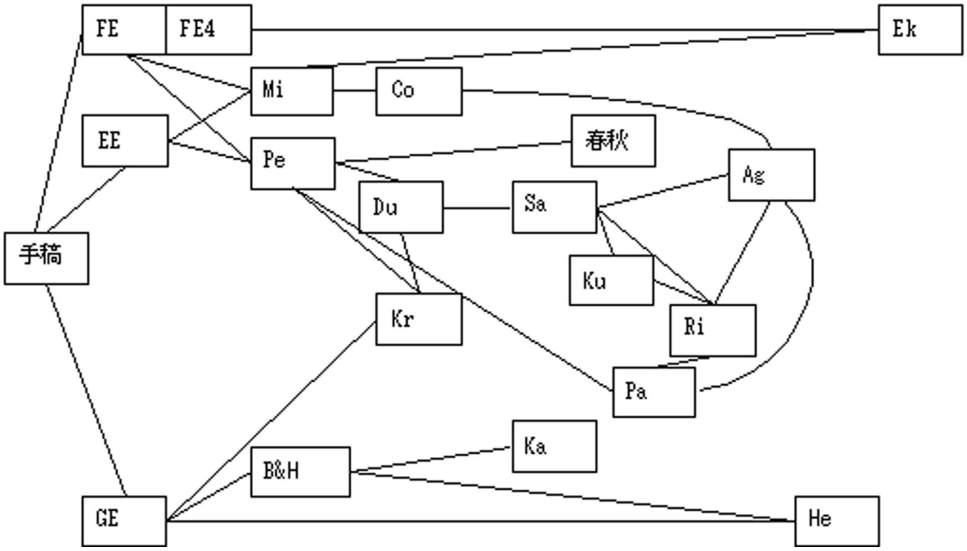
Ag: Chopin, Frédéric. *Sonate*, edited by G. Agosti, Milano: Curci, 1965, E.8098C.

He: Chopin, Frédéric. *Klaviersonate,* edited by E. Zimmermann, fingering by H.M. Theopold, München: Henle, 1976/2004, 289.

Kr: Chopin, Frédéric. *Sonate*, L.クロイツァー校訂，（訳者不明），東京：音楽之友社，1992年。

(= edited by L. Kreutzer, Berlin: Ullstein, [c.1924] , T.A.183.)

Pa: Chopin, Frédéric. *Sonaty,* I.J.パデレフスキ校訂，田村進，寺田由美子訳，東京：アーツ出版，1993年。(= edited by I.J. Paderewski, Krakow: PWM, 1950, PWM235.)

Ek: Chopin, Frédéric. *Sonaty*, edited by J. Ekier, Krakow, PWM, 1995/2004, PWM9731.

系譜図